

漢方薬を導入した臨床栄養の新しい展開

共催：株式会社ツムラ

漢方薬への理解の高まりや生薬学の進歩から、様々な医療現場で漢方薬が導入されて有効性が認識されるようになってきました。漢方には脾胃（消化器）が元気の源で、消化器を大事にして適切な食生活をするのが健康につながるという考え方があります。漢方の長い歴史の中で消化器の諸症状を改善する多くの漢方薬が開発されてきました。大建中湯、六君子湯、大黄甘草湯、小建中湯、半夏厚朴湯などはその代表例ですが、近年、有効性を証明するエビデンスの集積が飛躍的に進んでいます。更に、補中益気湯や十全大補湯は免疫学的作用とともに悪液質やサルコペニアの改善効果なども報告されています。漢方薬を西洋薬と一緒に使えるのは日本だけで、漢方と西洋医学の融合により様々な分野において治療成績の向上が期待されていますが臨床栄養もその一例です。本シンポジウムでは多様な栄養障害に対して漢方薬を導入した経験やそのエビデンスについての議論を深めることが出来ればと考えています。